

「言葉の力」で市民大学マインドの継承を！

「数の力」でも
「金の力」でもなく
「言葉の力」で
たたかう市民として。



市民が持ちうる唯一最大の力は「言葉」、と徳田代表幹事

12月24日、最終講座「市民活動のプレゼン術」が開催され、県内外から42名の参加者が集まりました。講座のテーマは、市民大学が一貫してこだわってきた「伝える言葉、伝わる言葉」。様々なワークを通してプレゼンテーションに必要な「コンセプト」「キーワード」「シナリオの(型)」「話し方」「見せ方」といった基本技術を学びました。講座の最後で徳田代表幹事は「プレゼンテーションには論理(ロゴス)と感情(パトス)の両方が必要。論理を伴わなければ理解を得られず、感情を伴わなければ共感を得られない。『金の力』もなく『数の力』もない私たちが、地域や社会で何かをするための最大の武器は『言葉の力』。論理と感情を兼ね備えた言葉の力を紡いでいきましょう」と呼びかけました。講座終了後にはプチクリスマスパーティーを開催、2017年、そしてつくば市民大学の活動をにぎやかに締めくくりました。

「昭和の家事上映会 ～ほうきづくり～」からみえたこと

足掛け3年にわたって開催してきた講座、最終回は「きれいにする」がテーマ。まずは記録映画「昭和の家事」の中から「洗濯をする」の映像鑑賞。たらいと洗濯板を使って洗い、何度もすすぎ、絞る…という、つらそうな作業が約30分続きました。すすぎ終わって「よっこいしょ」と立ち上がるスズさんの姿に、参加者は思わず「ホッ」と息をついていました。その後は、ホウキグサの栽培から手がけてほうきを作っているフクシマアズサさんより、栽培の様子やホウキモロコシの「穂」と「ほうきの使いやすさ」の関係性など、職人ならではの解説をしていただきました。その後、フクシマさんの指導のもと、ひとり1本ずつミニほうきを作りました。日々繰り返される家事労働。機械化が進んだとはいえ、今も昔も変わらないのは、その目的は自分や周りの人が心地よく過ごすためだということ。ただの作業でなく「心をこめる」感覚は受け継ぎ、思い出したいものです。



ほうきづくりは、ホウキモロコシの穂の脱穀からはじめました

リラックスして、マジメに語りあう「わたしたちと政治」



講座のスタートは「かんぱーい！」から(ノンアルコールですが)

「一筋縄ではいかない問い」をめぐる対話をじっくりと楽しむ、「くわしーたち」として生きるためのダイアログ・バー。「多数決で決めればよい?」「『私の勝手』で済む?」「『異文化体験』でわかりあえる?」など、社会とのかかわりの中の小さな問いを、政治理論の知見を援用しながら語り合う全9回の連続講座でした。つくば市内・外、遠いところでは栃木、静岡、長野から来てくれる人もあり、年齢も50代から2歳(!)までと幅広く、多様な参加者が集まり、毎回盛況でした。夜間開催、そして「バー」と銘打っていることもあり、毎回ちょっぴりアダルトな雰囲気場で場をしつらえました。始まりはカクテルやビール(ノンアルコール)で乾杯。参加者がそれぞれ持ち寄ったおつまみや軽食を堪能しながら、おしゃべりでも議論でもない、ちょっぴりマジメでアカデミックな「対話」を深めあうという、とつとつつくば市民大学らしい講座でした。

特集・私とつくば市民大学

つくば市民大学活動休止にあたり、幹事として運営に携わっていただいた4人の方々に、市民大学とのかわり、「贈る言葉」を語っていただきました。幹事の皆さん、お世話になりました！

市民大学での経験を自分の「現場」へ

赤松洋子さん

つくば子ども劇場で事務局長としてNPO運営に携わっていた頃、横田さん(茨城NPOセンター・コモンズ)から市民大学立ち上げの話を聞き、開校イベントに参加、学生証番号10番。NPO運営に役立ちそうな講座を受講し、防災ラジオドラマにも参加、自宅が近いので支援物資の仕分けに通いました。

もともと演劇ワークショップの活動をしていたので、市民大学の「学びあう」に共感していましたが、子ども劇場のことで手一杯。講座主催には至りませんでした。

震災を機に、自力での活動に限界を感じ、2012年から社会人大学院で文化政策について研究的に取り組み始めました。市民大学はしばらくお休み、と伝えたのに、同年より幹事として企画に携わることに。

この6年間、フューチャーセッション『地域×アート＝？』、北村さん、とこりさんと「ともに楽しむアートコモン・ラボ」、「市民活動をパワーアップさせる調査分析術」、親子向け講座、常総支援、いばらき子ども大学運営などに携わり、ラスト2年は事務局活動にも従事しました。

市民大学は「まなぶ・つながる・つくりだす」場。公共ホール、市役所職員の方々との対話のきっかけをいただき、子ども劇場だけでは成し得なかった協働事業に踏み出しました。

今後はできれば、本来の演劇的な活動を通して、楽しみながら考え、気づく体験を、多くの方に提供したいと思います。

「響きあう」ってこういうことなんだ！

北村まさみさん

出会う機会のあまりない、障がいのある人となない人が、まざって知り合う場をとはじめた「つくばバリアフリー学習会」。つくば市民大学を知り、共催講座をはじめた2009年9月から“いっしょに学習会”講座を40回以上、また、2010年から幹事として主にダイバーシティ講座の企画を、これまで担当してきました。もし市民大学に参加していなかったら、「多様性を築く」講座や伴走の講座、防災講座、アートコモン・ラボ講座のような場は実現できていなかったことでしょう。

講座開催を後押ししてくれる仕組みと物心両方のバリアフリーな場があり、相談できる仲間と関心を寄せ集まってくれる人たちがいたおかげで、それぞれの人が持つ経験、知見、専門が集まり、まざり、響きあい、つくりだすことができました。

「学習会」の名の由来「学んだことの証は、ただ一つで、何かがかかわること」(林竹二『学ぶということ』)を、市民大学の場で改めてその通りなのだ実感してきました。はじめは正直ぴんとこなかった「響きあう」でしたが、対話重視、お互いの経験から学ぶという市民大学の学びあいの中で「響きあうってこういうことなんだ」と折々実感、その楽しさも教わりました。

思いを持って今の形のつくば市民大学を創設してくれた方がたはじめ、関わり支えてくださった皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

違うから面白い ～講座を開催して～

小池容子さん

講座「今ここにある暮らしからつなげる未来(略称:イマココ)」を仲間と開催できたことは、つくば市民大学との関わりの中で、私に変化をもたらしたことのひとつでした。

イマココではさまざまなテーマで話題提供者をお招きし「自分が明日からできることは何か？」を見つけることを目標としてきました。大事にしていたのが、話題提供の後に、参加者だけでなく話題提供者も加わっての対話の場。参加者は世代も仕事も、家族構成も異なり、きっと思いがけない着眼点、感想、疑問が出され、まなびが深まるきっかけになるのでは？と期待してのことでした。

ただ開催当初、私自身は「まなぶ」とは一人ですもの意識が強く、対話の場にそれほど期待していませんでした。しかし回を重ね対話に参加していくうちに、自分とは異なる意見に対して「違うけど、面白い」「受け入れ難い。でもなぜ難しいのか？」ととらえ、そのテーマに関して考える糸口が増えた！と歓迎するようになりました。一人ではできない、ともに「まなぶ」ことの魅力を肌で感じたのです。

と同時に、普段の生活でもイマココの場と同様、いやそれ以上に「違い」が存在することを意識する様になり、見える景色が変わったように思います。

SNSなどを通して、現代は興味関心の近い人たちとつながりやすくなり、「違い」は避けられる向きがあるのかもしれませんが、でも、それではもったいない。違いを歓迎する空気を作っていくものです。

90ミリリットルの水、的な。

徳田太郎さん

コップに半分の水を見て、「もう半分だ！」ではなく、「まだ半分だ…」と思ってしまう性格であるということ差し引いたとしても。やるべきこと、やりたいこと、やれることを、すべてやりきったか？と問われれば、自信を持ってうなずくことはできず。

9年間の活動の成果は？と問われれば、「えーっと…」と口ごもってしまうだろうことは目に見えており。

そして何よりも、2009年との比較において、社会が「よい方向」に向いているという、確たる実感があるわけではなく。

(っていうか、どんどん「悪い方向」に向かってませんか？)

…では、つくば市民大学が、まったく意味のない存在だったかという、決してそんなことはないわけで。

たとえ、一つひとつは、小さくて、弱くて、ゆっくりで、バラバラであったとしても、さまざまな「変化」が生まれ、育まれた場であったことは間違いなく。

そのような場に集いあい、問いあい、語りあい、聴きあった仲間の存在は、ただただ尊いものだと思うのです。

え？9年前に戻ったら？ やらないでしょうね(笑)…なーんて言っている、たぶん、やるんだろな。

なにしろ、「まだ半分」ですからね。しばらくしたら、一滴一滴、また水を注ぎ始めるのだと思います。

また、ご一緒しましょうね。

つくば市民大学

〒305-0033 つくば市東新井15-2 ろうきんビル5階

TEL:029-828-8891 Fax:029-828-8892

e-mail:info@tsukuba-cu.net